

PART 1



氏名	柏木 郁 (かしわぎ いく)
最終学歴	K大学経済学部理工学部 卒業見込
資格	T●EIC: 870点、普通自動車免許
趣味・特技	ダンス (高校で部活、大学でサークル所属)
志望動機・ 自己PR	貴社の研究開発部門で特にバイオ関連の様々な研究に取り組みたいです。貴社は最新技術や生命分野に特に強みを持っていること、若手も大胆に登用する社風であることから志望しました。大学では理工学部生命情報学科で学ぶと共に、ダンスサークルの副部長として打ち込んできました。一つの職種にはこだわりませんが、自分の成長を通じて会社の発展に貢献していきたいです。

《バイオベンチャー企業・K社最終面接にて》

【人事部長】 「次のコはミスK大になってますね」

【社長】 「今までアピールしてなかったらしいな」

「はい、友達に無理やり出場させられたそうで」



「外見で選ばれたくないと……成績も優秀なんだね。大学院に行かずに、大企業でもなく、なぜウチに？」

「はい、当社の技術力と、バイオ研究の第一人者である社長に憧れて第一志望とのことですよ」

「それは光栄だねえ」

《入社後、1か月の研修。理解が早くはきはきして可愛い郁はどの部署でも人気者に。終了時に配属通知》

【人事部長】 「君は研究開発部門希望だったね」

【郁】 「はい、バイオ関連の研究を希望しています」

「ただ、最初の配属は社長室秘書課に決定したよ」

「え、どうしてですか？」

「社長が君を直々に指名してね、まずは自分について、経営全般を見てほしいそうなんだ」

「社長がですか……」

「ああ、君には大変期待していると言ってたよ」

「具体的にはどういった業務をするのでしょうか？」

「社長のスケジュール管理、来客対応……社長宛のメール対応や経営会議・商談資料の素案作成などだな」
「そのような資料は経営企画や営業の業務では？」

「うちは小さな会社だからね。社長が自分で資料を作ることも多いんだ。忙しいから秘書と分担してるんだ」

「分かりました、頑張ります！」

「先輩の前原くんの言うことをよく聞いて頑張って」

《配属初日》

【郁】「おはようございます！ 今日から秘書課に配属となりました、柏木郁です。よろしくお願いします」

《パチパチパチと拍手》

【社長・三浦】「よろしくね！ 期待してるよ！」

「ありがとうございます。あの、服装はこんな感じでよろしかったでしょうか？」
（胸が開いてるし、タイトミニなんて恥ずかしい……）

【秘書・前原翠】「私の指示どおりの服装ね。良く似合ってるわよ」

「うん、いいんじゃないかな」
（やっぱり胸大きいな）

「社長、本日の最後は大口のお客様との商談があります。柏木さんも同席でよろしいでしょうか？」

「そうだね。顔を覚えてもらうのは秘書として大事だからね。会社の今の経営課題も分かるし」

「何も分かりませんが、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫！ でも自信のない素振りは厳禁よ」

「うちは小さい会社だから、秘書課は経営にも営業にも関わってもらうんだ。研究部門でも役に立つ経験だぞ」

「はい、頑張ります！」
（秘書課に配属で良かった）

《大手飲料メーカー・ハニーヴィバレッジにて》

【社長】 「こちらが新人秘書の柏木です」

「はじめまして、柏木郁と申します。これからどうぞよろしくお願いいたします」

【権藤営業部長】 「こちらこそよろしくね……今度の子もすごい美人だねえ」

「……ありがとうございます」 (目がいやらしい……)

【翠】 「私も美人ということですね、恐縮です (笑)」



「実は彼女、ミスK大だったんですよ」

「ほお、すごいね！ スリーサイズは？」

「いえ、あの……」 《太ももを手で庇う》

「そういうお話は後ほどゆっくりと (笑)」

【部長、例の件、少々詳しくご相談したいのですが」

「ああ、そうだったね。最後の詰めだったかな」

「それでは、私たちは一旦失礼します」

《内密の商談の間、近所の喫茶店で待機する二人》

「どうだった、初めて商談に同席してみて？」

「とても緊張しました。あと、ちよつと権藤部長の視線が気になってしまつて……」

「あの人は少し極端だけど、男は皆、あんなものよ」

「翠さんは、うまくかわしててすごいと思いました」

「慣れれば大丈夫よ。ただね、ウチは小さな会社だから一つ二つの案件がとても大事なの」

「はい、分かります」

「研究開発力は三浦社長のおかげで日本一の分野もあるわ。だけど、当面は地道な営業で稼がないといけないの。ハニー社にウチが開発した酵母を使ってもらえれば、大きな収入になつて、宣伝にもなるの」

「分かりました。研究のためにも収入が必要ですよね」

「そうね。ただ、秘書の仕事って綺麗事だけではすまないの。今日は絶対、権藤部長には機嫌良く帰っていただきたいの……分かってくれるわね？」

「大丈夫です。私ができることならなんでもします！」

PART 2

《ハニー社の系列のお洒落なレストランで接待》

「本日はありがとうございます。この度の大口の提携、弊社にとっての大きなチャンスになります」

【権藤】「いやいや、K社さんの研究開発力は高く評価してるからね。あとはちよつと法務とか社内調整があるけど、まあ何とかするから」

「なにとぞよろしくお願いいたします」

「部長、本日はありがとうございます。どうぞー！」

《笑顔を作って権藤にビールを注ぐ郁》



「ミスK大のお嬢様のお酌なんて嬉しいねえ」

「あら、私のお酌では駄目でしたか？」 《一同笑い》

「ごめんごめん、翠ちゃんのお酌もちろん最高だよ」

《会は順調に進み、権藤の酔いが回ってくる》

「そう言えば郁ちゃん、スリーサイズは？」

《郁がためらうと、机の下で翠に小突かれる》

「……84・60・86、です……」 「おっぱい大きいね！」

《2次会はカラオケ。到着すると、トイレに行くと言って翠と郁は席を外す。翠は別の部屋に入っていく》

「あの、どうしてここに？」

「ちよっとした演出をするのよ。サプライズね」

「どのようなことでしょうか？」

「郁ちゃん、これを着てくれる？」

「……これ、ウエディングドレスじゃないですか！」

「ええ。あなたのミスK大の時の衣装を用意したわ」

「そ、そんな……」 (思い出の衣装なのに)



「あなた、何でもするって言ったわよね？」

「それはそうですけど……」

「あちらは接待慣れしてるのよ。これくらいしないと」

「……分かりました。社長がしたい研究をするために必要なんですよね」

「正直、万一この提携が流れたらウチはピンチよ」

「分かりました……あの、インナーが無いんですけど」

「あれ、おかしいなあ……仕方ないわね」

《思い出のドレスを身に着け、元の部屋に戻る郁と翠》
「じゃーん、おまたせしましたー！」

「ミスK大の時のドレスを完璧に再現しました！」
（ブラ無しなんて、恥ずかしい……）

「おお、これはすごい！ほんとに可愛いねー！」
《ご機嫌で拍手する権藤》

「それじゃあ郁ちゃんは部長の隣に座って……」

「部長、いつものあの歌、聞かせてください！」

「おお、分かったよ。きみの歌も聞きたいなあ」

《ご機嫌で懐メロを歌う権藤。みんなで手拍子》



《三浦、翠が得意な曲を歌い場をさらに盛り上げる》

「郁ちゃんの曲は入れといたよー」

「え、何ですか？（笑）」（勝手に入れないで……）

「松野聖子ちゃんのデビュー曲！」

「いいですねえ！」「絶対郁ちゃんに合う！」

《二人が視線で郁に合図を送る》

「ではちよつとよろ覚えですが、歌いますー！」（すっ）
い懐メロ……可愛く歌えばいいのよね

《伸びのある綺麗な高音で歌い始める郁。有名な曲なので大体知っているが、振りがぎこちない。翠がジエスチャーを見せて助ける》

「……あなたに、ずっとそばに、いてほしい！」
(ここでウィンクするのよね……仕方ないわ)

《サビの部分で権藤に向けてウィンクした郁》

「かわいい、郁ちゃん、最高！」

「ありがとうございます！」

《権藤が席を立ち、近づいてくる》

(え……)

「そっかあ、俺にそばにいてほしいのかあ」 (にやけ顔で郁の左隣に立つ)

「あの、権藤さん……あー、私のー、恋はー」 (やだ、ちよつと近い)

「郁ちゃん、がんばってー」 (ほら、笑顔！)

「郁ちゃん、肌も綺麗だねえ」 《さらに近づく》

《隣に立ち、手を伸ばす権藤》

「郁ちゃん、がんばれー」 《郁の肩に右手を乗せる》

「あなたのく、きやつ！」 《視線で翠に救いを求める》

「うわ、仲いいですね！」 《お似合いですよー》

「瞳がく好き、なのく」 《会社のために我慢しなきゃ》

《調子に乗った権藤が、肩を撫でさすり、指を微妙に動かして揉みだす》

「いつまでも、いたいく……あの、権藤さん？」

「どうしたのかな？」 《ちらりとぐいっと肩を抱き寄せる》

《真上からまともにも胸元を覗きこむ権藤》

「あれえ、郁ちゃん、ブラはしてるのかな？」

「え、その、あの……私は、あなたと」

「ミスコンの時のドレスを完璧に再現したんだよね？
まさかノーブラじゃないよね？」

「一緒に……あの、それはちよつと……」

「ちよつと、じゃ分からないなあ。確認しよっかな」

《右腕をぐつと伸ばし、手を郁の左胸の上に置く》

「きゃあ！ すみません、困ります……」

「ほら、歌に集中しないと！」 《手拍子する翠》

「うーん、着けてるかなあ？」 《胸をさわさわと撫で、指をくねらせる権藤》

「これからも、ずっと……あ、あん」

(社長、翠さん、助けてください！)

《「に」に」と手拍子を続ける社長と翠》

「フワフワしてて柔らかいね」 《手を広げ乳房を掴む》

「きゃー！」 (こんなことまで我慢しなきゃいけないの?)

PART 3

《もはや歌にならない郁。伴奏だけが流れる》

「ねえ、今はノーブラなのかな？」 《ぎゅっと揉む》

「きゃっ！ そ、それは……」 (恥ずかしくて言えない)

「今はノーブラです！ あまり苛めちゃ駄目ですよ」

「そうなんだ(笑) それじゃあ、パンティは？」

「は、穿いてます！」

「色はドレスとお揃いかな？」

「そ、それは……」

「よし、確かめよう！」



《スカートを捲られ、パンティが露出》

「きゃ、きゃああっ！」

「穿いてるかな？もしかしてノーパン？」

「残念ながら穿いてますねえ(笑)」

「緑の横縞で郁ちゃんらしいですよー(笑)」

「俺からは見えないなあ……ノーブラ、確認しようかな」

《乳房を掴む右手をさらに広げ、親指をドレスの胸元から差し込む権藤》

「おお、生乳だ！　すべてで柔らかいねえ」

「権藤さん！　もう、やめてくださいっ！」

「部長、そのくらいで……」

「だけどノーブラかは気になるだろう？」

「それはそうですが……」

「よし、よく見てろよ！」

「きや、きやあっ……」

《権藤が親指を中に入れたままで右手をぐっと下ろし、ドレスを押し下げる。露出した乳房を必死に庇う郁》

「ひ、ひどいです、こんなの……」

「ちよっと可哀そうかも。でもきれいな肌ねえ」

「あれ、手で隠しちゃ駄目だよ。かわいいおっぱい、社長に見てもらいな」

「いやあっ……」

《郁に押さええられた右手を引き抜き、逆に郁の右手を掴もうとする権藤》

「ほら、きれいなおっぱい、みんなに見せてよ」

「きゃあ！ やめてください！」

《右手と左腕を掴まれそうになり必死に抗う郁》

「ダメですっ……助けてください！」

《三浦と翠を見て訴える郁》

「社長は君の可愛いおっぱいが見たいってさ、なあ？」

「いや、そんな……はい」 「社長！」

「はい、御開帳！」

「きゃああっ」

《思い切り力を入れた右手を徐々に持ち上げられる郁。ついに左の乳房が露になる》

「どうだ見えるか、三浦さん、翠ちゃん？」

「…見えますね」 「可愛いピンクの乳首です」

《我慢するよう視線を送る翠》

（そ、そんな……）

「ほう、ピンクの乳首か！ 隣からじゃよく見えないな
……こっち向いて、郁ちゃん」

《調子に乗った権藤が、郁の肩を掴み、自分の方に向け
よつとする……》

「もう、いい加減にしてください！」

《一瞬の隙に、両手で権藤を突き飛ばす郁》

《予想外の反撃に倒れていく権藤》

「うわあっ！」

「権藤部長！」 (おお、おっぱい丸出し！W)

「ちよつと郁ちゃん！」 (ふふ、可哀そう)

《突き飛ばされた権藤は床に転がり、腰を強く打つ》

「いってえ！ 郁ちゃん、ひどいよー」 《顔をしかめ、

腰をさすりながら体を起こす》

「部長、申し訳ありません！」

「大丈夫ですか、権藤部長！ あなたも謝りなさい！」

《ドレスを直しながら頭を下げる郁》

「え、そんな……申し訳ありません……」

（何で私が謝らなきゃいけないの？）

《腰を押さえて立ち上がる権藤》

「いてて……俺が悪かったよ、ごめんね、郁ちゃん」

「とんでもございません、大変失礼しました！」

「私の指導不足です。何卒ご容赦ください」

「申し訳ありません！」 （提携のためよ……）

「分かった、分かったよ。気にしないでいいから」

《気まずい雰囲気のまま接待終了》

《翌朝。社長室》

「おはようございます。昨日は申し訳ありませんでした」

「私がついていながら、申し訳ございません」

「大丈夫、権藤さんには僕から謝っておくから」

「あの……提携の件に影響は出ないでしょうか？」

「まあ、権藤さんだって大人だから、大丈夫だよ」

「ぜひ挽回の機会をいただきたいので、何かありましたら私たちに遠慮なくご指示ください」

《社長が外出後、残った二人》

「あの、あんなことまで我慢しなければ駄目でしょうか」

「違うわ。あんなことをさせたのが失敗ね。肩を抱かれたら、きやあ、セクハラー！って、笑って振り払うのよ」

「……すみませんでした。提携の方、大丈夫でしょうか」

「正直、かなり厳しいかもねえ。この提携、かなり頼み込んでやっとここまで来たの。ハニー社としては、将来のうちの発展に期待して組んだだけで、儲けは少ないわ」

《電話のベルが鳴る》「……営業部から、すぐ来いと」

《営業部に呼び出された翠と郁》

「あの、どうかされましたか？」

【営業部長・錦戸】 「君たち、昨日ハニー社で何したの？ さっき電話があつて、法務的な問題がクリアできなから、今回の提携は見送りを覚悟しろってさ」

「も、申し訳ありません!!」

「ん、新人の君が何かしたの？」

「実は接待のカラオケで少しご機嫌を損ねてしまって」

「はあ？ 秘書なんてニコニコ笑ってればいいのに、どうして怒らせるわけ？」

「その言い方はひどくありません？ N社の件では契約書のミスを秘書課で内密にカバーしましたよね？」

「……すまん、ちよつと言ひ過ぎた。ただ今回の件は絶対に落とせないこと、分かるだろ？」

「あの……絶対落とせない、のですか？」

「そんなことも知らないの？ 今、うちは資金繰りがかなりピンチで、この事業の手付をハニー社からももらえないと不渡り出しかねないんだよ」

「私、今からハニー社に行つて謝罪します!!」

《同じ頃。三浦社長より権藤部長に電話》

【社長】 『権藤部長、昨日はうちの新人秘書が大変な失礼を働いてしまい、誠に申し訳ございませんでした』

【権藤】 『いや、こっちこそ酔っちゃって失礼したね』

『お詫びとお礼を兼ね、記念の画像をお送りしました』



『ほう、撮ってたのか！ 太ももむちむちだねえ』

『はい、権藤部長がうまくスカートをめくってくださったので撮れました』

『褒められてるのかなw……それじゃあ、他の画像もあるのかな？』

『もちろんです、次のファイルをご覧ください』

『おお、これは！ 実にいい画像だねw』

『こちら部長のお見事な成果ですw』

『大きくて可愛いおっぱいだねえ……突き飛ばした瞬間にプルプル震えてるのもいいねえ。痛かったけどw』

『その件につきましては誠に失礼いたしました』



『……よろしければ、彼女に挽回の機会を頂けませんか』

『うん、分かったよ。方法は任せてもらえるかな？』

『はい、ご自由にお使いください。……提携の件につきましては、ぜひ前向きにご検討お願いします』

『分かってるよ。まあ、彼女の頑張り次第かなw』

使用したプログラム・素材等

- 本作品は、ILLUSIONの「ハニーセレクト ～コンプリートパック～」を使用して作成しています。 (http://www.illusion.jp/preview/honey_party/index.php)
- また、イリュージョン公式ページに投稿のキャラデータやシーンデータを活用しています。その他、個人HPに掲載の服なども使用しています。各作者の方に感謝いたします。
- 本作品のコンテンツの著作権は ILLUSIONに帰属し、販売等は認められていません。転載・販売等を行わないようお願いします。